



【札幌市南區】

## 石山六区の一年

札幌市南区石山地区は、かつて札幌軟石の砕石地で、「石切山」と呼ばれていました。現在も市街化調整区域とされ、札幌市内とは思えない農村風景が広がっています。以前は1区から8区に区分され、このうち旧石山6区の町内会で農業を営んだり、もう農家はやめたけれど市民農園を営んでいる、といった人たちが、私たちの会の主な構成員です。道内のどの地域の農家も同じ悩みを抱えていると思いますが、札幌近郊の私たちも近年、シカやアライグマ、ヒグマによる食害対策に非常に苦労させられています。少しでも獣害を減らそうと、町内会のボランティアが集まって、野生動物がなるべく農地に近づきにくいように、畑と森林の間に生えているシラカバやヤナギを伐採する活動を始めたのが、こうして本格的に森づくりに取り組むきっかけになりました。この手のボランティアはお年寄りが多くなりがちですが、ここでは30~40歳代の新規就農者が6名ほど加わってくれて、高木の伐倒作業などは、この若者たちがコアになってがんばっています。

構成員のうち2名が所有する約3haの森が私たちの活動エリアです。きょう、私は「石山六区の一年」と題して発表しているわけですが、構成員の大半が本業は農家ですので、実は森づくりの活動ができるのは農閑期の冬場、12月から2月までの3カ月間だけです。逆にいうと、冬は農家は何もすることがないので、その間にどんどん森の仕事にチャレンジしています。

去年は、約70年生のカラマツ人工林内に約200mの作業道をつけ、倒した木をここから搬出できるようにしました。みんな農家ですから、自前のトラクターなどを自由に使えるのは強みです。

搬出したら玉切りにして、畑の間に積み上げていきます。1~2年かけて乾燥させた後、またトラクターでビニールハウス内に運んで、さらに乾燥させます。サイズが少々不揃いでも、釜石市のメーカーが製造している「ゴロン太」という木質バイオマスボイラーを使うと、効率よく燃焼させることができます。構成員の農家が、それぞれ100坪程度のハウスの冬期間の暖房にこれを活用していて、おかげで厳

冬期にもハウスの中ではハウレンソウが青々と育っています。

打ち落とした細い枝も搬出して畑の脇で乾燥させ、一昨年導入したチップパー(粉碎機)にかけ、廃油などを混ぜてオリジナルの焚きつけにしています。ビニールハウス内の霜対策として、多くの農家は練炭を焚いていると思いますが、私たちは森の薪を使ってスウェーデントーチを作り、一斗缶に立てて、ハウス内で毎晩4~5本点灯しています。これまた森からたくさん出てくるマツの枝葉は、畑に暗渠を造る際に、疎水材として活用しています。

時には、胸高直径1m近い大木を切り倒すこともあります。去年は、チェーンソーで製材を試み、その製材を使ってカーポートを建ててみました。建築という大きさですけれど、こんな活用方法も模索しています。次年度は製材にもチャレンジして、石山六区のカラマツ製材だけで何かを作りたいと考えているところです。

今後、経済的にどうやってこの活動を回していくか、というのが一番の課題です。作業した人に手間賃くらいは出したいですし、キャンパー向けの薪販売などを検討しているところです。私たちは2020年度からこの交付金事業に参加し始めたわけですが、ちょうど新型コロナウイルス感染症拡大の時期と重なってしまい、構成員のうち、特に高齢者が参加しにくい状況が続いて、計画通りに事業を進めることがなかなかできませんでした。その意味でも、一刻も早くコロナが落ち着いてくれることを願っています。



## 石山六区森林保全の会

【報告者】



三原孝義さん